

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

# にしあいづ物語100選 その90 (新編)

文：鈴木 圭介

## 井谷村のロマン ―水路の遺構―

井谷の下手の山腹には断続的に「ばんのじょうせき跡」という水路の遺構があります。この遺構は「落盤によって工事が中断した」と伝えられています。ですが、「いつ、だれが、何の目的で」工事をしようとしたのか分かっていない謎の水路です。「ばんのじょう」は人名で「万之丞」であろうと思われます。

落盤した向け山から推理すると水路の出口は、柴崎村の堤あたりであるから、水は「なぎの平」用水であったのでしょう。

柴崎村は五十数戸で、集落の大きさに比べ耕地が少なく、村人には、舟を上流に引くことを生業とする人も多かったと思います。台地（難儀<sup>なんぎ</sup>の平<sup>たいら</sup>）を開墾して畑作や水田にして生活を豊かにすることは、だれしもが願うところでした。当初の水田は浅いくぼ地（溝）から出るわずかな水を利用したと考えられます。

そこで、井谷近くの山の谷をせき止めて建設した堤（沼）を水源とする稲作を始めたものの、水は十分ではありませんでした。そのため、さらに上流に2つの堤を設けたと考えられますが、「ばんのじょうせき」との前後関係はわかりません。

明治初期の記録にはこの「三ツ俣沢」の堤の修理を願い出た記録がいくつかありますが、それ以前の古い柴崎の資料は、大火で焼失して残っていません。

「ばんのじょうせき」の失敗が、第2、第3の堤工事へと発展したとも考えられますが、これも資料焼失で分かりません。



不思議なことは、水源が井谷にあるのに、なぜ他村に水を引く工事が行なわれたのかということです。井谷の大平新田が開田されていれば、絶対に水は他村に譲らなかったはず。あるいは井谷村そのものがなかったか、数軒の家のみであったころかもしれません。

しかし、「なぎの平の一部を井谷の水田（耕作権）」と認める」との条件ならば井谷も譲歩したことでしょう。

（次号へつづく）

### お詫びと訂正

9月号5ページの二十歳を祝う会出席者に記載の塚原健翔さんの出身自治区は、正しくは下野尻です。お詫びして訂正します。

### 今月の表紙

今月号から来年1月号までの4カ月間、「西会津町誕生70周年特集」を掲載します。また、特別企画として、今月号から12月号までの表紙を横に並べると1枚の写真になります。毎号、残していただけたら嬉しいですよ。

### 編集後記

西会津町誕生70周年という節目の年に広報紙に携われることをありがたく感じています。広報担当2年目でまだまだ未熟ですが、先輩方から引き継いだ広報のバトンを繋げられるように努めたいと思います。（伊藤）